# 江戸時代随筆集にみる狂気

## ―第二報―

昼田　源四郎

第八十六回総会での第一報で演者は、江戸時代の随筆集から狂気の事例を拾いだし、狂気の原因について、当時どのように記載されていたかを報告した。狂気の解釈体系は、㈠日常的な解釈の拡張によるもの、㈡医療・医学概念の拡張によるもの、㈢非日常の解釈枠組の適用によるもの、の三群に大別できた。今回は代表的な事例をいくつか取出し、考察を進めたい。

㈠日常的な解釈の拡張　この中では、狂気を心因的に、共感的に理解しようとする態度が代表的である。これは今日においても、精神障害を疑わせる言動の異常に直面した人びとが最初にとる態度である。この「共感」の幅は今日でも人により多様であるが、時代によっても異なる可能性がある。『巷街贅説』には、疱瘡全快を焔魔王に祈願したかいもなく愛児を失った職人が、「嘆きの余り狂乱」した話が載っている。「狂乱」がどの程度のものかの記載はないが、この例や、大火のような「をどろきにて」狂人になることは多いとの理解（『北窓瑣談』）は了解できる。しかし、良家の二男だったものが「慢心によりて狂乱」したという解釈（『兎園小説外集』）にいたっては現代のわれわれには了解がむつかしい。狂気を道徳的頽廃の結果と考える考え方が背景にあって、こうした解釈も出てきたのであろう。

対話性幻聴を腹のなかに虫がいるためと考える「応声虫」や、毒キノコによる幻覚症状の記載も興味深い。

㈢非日常の解釈枠組の適用　『久夢日記』には「番町皿屋敷」の話が載っている。井戸に身を投げた藤の幽霊のために、藤をおとしいれた主人・彦六は狂い死にしてしまう。それは藤の死霊の祟りと考えられた。狂気を祟りのためと解釈している事例は多い。横死した者、水子や先祖の霊、動物霊も祟った。祟りはこの世の、さまざまな災禍の原因だったが、その災禍のひとつが狂気であった。自然・本来の姿を奪われたものが祟りをなすことで自然・本来へ

の復帰を要求し、自己の恨みや希望を告知する。悪霊は祀りこめて善神（守護神）に転化させるか、悪霊以上に霊力のある善神にすがって追い払うかされた。祟りの思想は御霊信仰の系譜をひくもので、日本の神観念の両義性を示している。

鬼神に追われ押えられ正気を奪われる、あるいは乗り移られる。まよわし神や狐などの動物霊に引き回される、化かされる、などの話も多い。この場合も、神仏に祈るかたちでの対立原理による治療が中心となっていた。タブーを侵犯した罰として狂気することもあった。

『塩尻』には、にわかに七転八倒の苦しみのうちに多数の赤子の幻覚を見、狂死した女医者の話が載っている。この女は下胎の薬を長年売っていたので、その現報であるとされた。仏教的な因果応報思想であるが、ここにも狂気を道徳的頽廃の結果ととらえる発想が認められる。

干ばつ、地震、疫病といった集団的災禍であれ、病気や怪我、火事、その他の個人的災禍であれ、そうした非日常的な災禍に対する当時の解釈枠組（パラダイム）があって、それの部分的な適用により一般の病いや狂気もまた解釈されたようだ。病いや狂気の解釈枠組を検討することは、江戸時代に生きた人びとの精神世界を、その信仰体系とコスモロジーを探る作業でもある。そこには現代と、時間を超えて共通する構造もあって、比較文化論としても興味深いものがある。

（針生ヶ丘病院）